

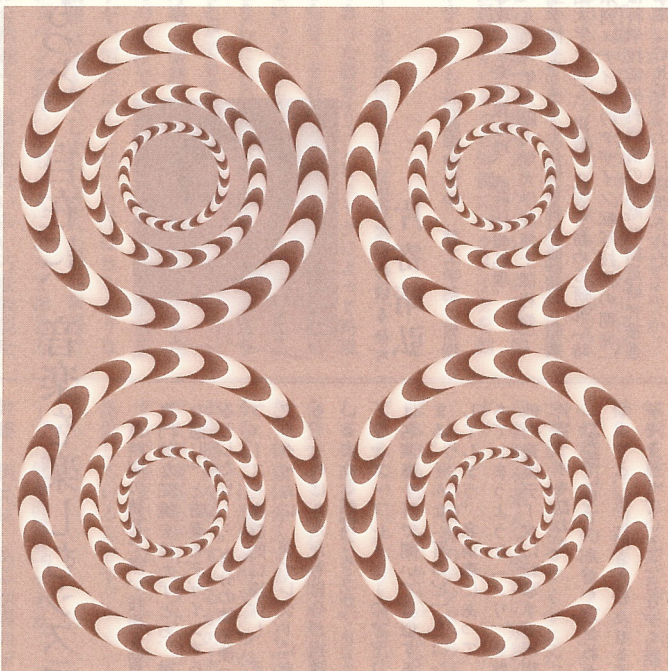
錯視を見せる工夫

北岡明佳

錯視といえば、少し前までは幾何学的錯視（形の錯視）のことで、シンプルな線画が多かった。しかし、今やパソコンの普及とともに、いろいろな種類の、しかも派手な錯視図形が急増中である。中でも、色の錯視と静止画が動いて見える錯視には人気がある。

「錯視研究者」を自認する私の課題の一つに、本稿のようなコラムをいかにおもしろく書くかということがある。そのためには、掲載する図の選び方も重要である。錯視量の少ない図形は、「見えない」人が多くなるので避けたいところなのだ。できれば過半数の人に「おもしろい」と言ってもらいたい。そんなサービスは学問には不要だ、という意見は正論であるが、錯視の場合は、図の「楽しさ」「おもしろさ」「美しさ」も、ある程度要求されていると感じている。

ここでは、静止画が動いて見える錯視を使うことにして、大きい図版でなくても十分な錯視量が期待できるものを検討したところ、左図に落ち着いた。左上と右下の大きいリングは反時計回りに、右上と左下は時計回りに回って見れば、私の意図通りである。この錯視は、「最適化型フレイザー・ウィルコックス錯視・タイプー」と私が呼んでいるもので、眼球運動と正に相関していることはわかっているが、そのメカニズムはよくわかっていない。



(立命館大学 きたおか・あきよし)

理
2016 2008

もくじ

巻頭エッセイ

錯視を見せる工夫

北岡明佳 2

インタビュー

もつと、自在に、音楽を楽しむシステム

片寄晴弘 4

連載 世界書店めぐり

古書と出会う

水野 尚 8

連載 日本近代人名地図(最終回)

日本社会を読み解くということ

中村牧子 10

自著を語る

ロバート・フロストの世界への誘い

山田武雄 14

営業部便り

15

連載 差異の詞典

【遊びと街なか】

角野幸博 16